

「思考力，判断力，表現力等」を育成する 中学校社会科学学習指導の工夫

— 持続可能な地域を構想させる授業の開発と実践を通して —

熊野町立熊野東中学校 鎌田 正幸

研究の要約

本研究は、課題を追究したり解決したりする活動を取り入れた、主体的・対話的で深い学びによる持続可能な地域を構想させる授業を開発し、実践することを通して、社会科における「思考力，判断力，表現力等」を育成することを目的としたものである。文献研究から、本研究における「思考力，判断力，表現力等」を、「社会的事象を考察して課題を把握し、その解決に向けて選択・判断する力や、選択・判断したことを説明する力，それらを基に議論する力」とした。単元全体を「課題把握」，「課題追究」，「課題解決」の三つの学習過程に区分し、地域を特色付ける地理的事象と人間の営みとを関連付けた学習活動を通じて、持続可能な地域を構想させる授業を開発し、実践することによって、これらの力を育成できると考えた。

そこで、身近な地域を題材とした持続可能な地域を構想させる授業を開発し、実践及び検証を行った。検証の結果、多くの生徒は、熊野町の課題を把握し、日本の諸地域の単元での既習事項を活用して、持続可能な熊野町を構想することができた。よって本研究は、「思考力，判断力，表現力等」の育成に効果的であると考えられる。

I 主題設定の理由

中学校学習指導要領（平成29年告示）解説社会編（平成30年，以下「29年解説」とする。）では、社会科の課題の二つが示され、これらの課題については、改善することが求められている⁽¹⁾。

- ① 主体的に社会の形成に参画しようとする態度や、資料から読み取った情報を基にして社会的事象の特色や意味などについて比較したり関連付けたり多面的・多角的に考察したりして表現する力の育成が不十分である。

② 課題を追究したり解決したりする活動を取り入れた授業が十分に行われていない。

図1 社会科の課題

* 「29年解説」を基に、筆者作成

①について、「29年解説」に、「思考力，判断力，表現力等」とは、社会的事象等の意味や意義，特色や相互の関連を考察する力とある⁽²⁾。

このことから、社会的事象等の意味や意義，特色や相互の関連を考察する力とは、「多面的・多角的に考察したりして表現する力」と考えられ、この力が社会科における「思考力，判断力，表現力等」であると捉えられる。

そこで、所属校で2019年度に実施された第1学年学力テスト結果の所属校と全国の平均点とを比較す

ると、所属校が全国より、社会科地理的分野の観点別では、思考・判断・表現は4.8点、技能は2.2点低く、知識・理解は9.4点高いことが分かった。また、2018年度及び2017年度の結果も同様であった。

このことから、①について、所属校において社会科地理的分野で「思考力，判断力，表現力等」を育成することが不十分であったと考えられる。

②について、平成31年度全国学力・学習状況調査において実施された生活アンケートの肯定的な意見の割合を分析すると、所属校が全国より、「主体的に課題解決に取り組む」に関わる質問では3.3ポイント低く、「他の生徒へ説明するために計画的に取り組む」に関わる質問では1.3ポイント低いことが分かった。

このことから、②について、所属校において、主体的・対話的で深い学びを授業に取り入れることが不十分であったと考えられる。

以上のことを踏まえて、課題を追究したり解決したりする活動を取り入れた主体的・対話的で深い学びによる持続可能な地域を構想させる授業を開発し、実践することによって、「思考力，判断力，表現力等」を育成できると考え、本主題を設定した。

Ⅱ 研究の基本的な考え方

1 「思考力、判断力、表現力等」の育成について (1) 「思考力、判断力、表現力等」とは

「29年解説」には『「思考力、判断力、表現力等」については、社会的事象等の意味や意義、特色や相互の関連を考察する力、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて構想する力や、考察したことや構想したことを説明する力、それらを基に議論する力として整理することができる』¹⁾と示されている。

また、地理的分野の目標について『多面的・多角的に考察したり、地理的な課題の解決に向けて公正に選択・判断したりする』学習過程を前提に、地域に関わる諸事象や特色を理解することを意味している。²⁾と示されている。

これらのことから、中学校社会科地理的分野における「思考力、判断力、表現力等」とは、地域に関わる諸事象や特色を考察する力、地域の課題を把握し、その解決に向けて選択・判断する力や、選択・判断したことを説明する力、それらを基に議論する力であると言える。

なお、「構想する力」などの資質・能力として使われている「構想」を、本研究では「選択・判断」と表記することとする。

(2) 「思考力、判断力、表現力等」を育成する学習指導について

ア 主体的・対話的で深い学びとは

「29年解説」では、中学校社会科における「主体的・対話的で深い学び」とは、「思考力、判断力、表現力等」を育成することが大切と示され、主体的に社会に関わろうとする態度を養うようにしたり、生徒同士の協働や学習の内容に関係する専門家などとの対話を通して自らの考えを広め深めたりする学びとある。また、「深い学び」に関しては、習得・活用・探究という学びの過程の中で、「見方・考え方」を働かせることが重要とある³⁾。

このことから、中学校社会科における主体的・対話的で深い学びとは、表1に示す主体的・対話的で深い学びの場面と学習過程であると考える。

表1ではまず、主体的な学びとして、自分の考えを把握させ、その解決への見通しをもたせ、振り返ることによって選択・判断する場面を設定する。

次に、対話的な学びとして、自分の考えの説明に対して他の生徒からの疑問を出させることによって、集団や自らの考えを広め、深める場面を設定する。

最後に、深い学びとして、「社会的な見方・考え方」

を働かせて課題を追究したり解決したりする学習活動の充実を図るために議論する場面を設定する。

表1 主体的・対話的で深い学びの場面と学習過程

視点	場面	学習過程
「主体的な学び」 ○学習課題を把握して解決への見通しをもつ ○学習したことを振り返る	社会的に見られる課題を把握して解決に向けて選択・判断する	動機付け 方向付け
「対話的な学び」 ○他者との対話を通して、集団や自らの考えを広め、深める	考察したことや選択・判断したことを説明する	情報収集 考察・構想
「深い学び」 ○「社会的な見方・考え方」を働かせて課題を追究したり解決したりする学習活動の充実を図る	考察したことや選択・判断したことを基に議論する	まとめ 振り返り

*幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)(以下、「答申」とする。)
別添資料3-6と「29年解説」pp.14-15を基に、筆者作成

イ 「社会的な見方・考え方」とは

「29年解説」では、『「社会的な見方・考え方」は社会的事象等を見たり考えたりする際の視点や方法であり、時間、空間、相互関係などの視点に着目して事実等に関する知識を習得し、それらを比較、関連付けなどして考察・構想し、特色や意味、理論などの概念等に関する知識を身に付けるために必要となるものである。』³⁾と示されている。

また、社会的事象の地理的な見方・考え方については、社会的事象を、位置や空間的な広がりに着目して捉え、地域の環境条件や地域間の結び付きなどの地域という枠組みの中で、人間の営みと関連付けて考察、選択・判断する際の視点や方法として整理したとある⁴⁾。

これらのことから、「社会的な見方・考え方」とは、視点や方法であると考えられる。また、社会的事象の地理的な見方・考え方とは、社会的事象を、位置や空間的な広がりに着目して捉え、地域の環境条件や地域間の結び付きなどの地域という枠組みの中で、人間の営みと関連付けて考察、選択・判断する際の視点や方法であると考えられる。

ウ 「社会的な見方・考え方」を働かせた学習活動とは

「29年解説」では、「課題を追究したり解決したりする活動については、単元など内容や時間のまとまりを見通して学習課題を設定し、諸資料や調査活動

などを通して調べたり、思考・判断・表現したりしながら、社会的事象の特色や意味などを理解したり社会への関心を高めたりする学習などを指している。」⁴⁾と示されている。

また、「社会的な見方・考え方」を働かせて課題を追究したり解決したりする学習活動の充実を図るためには、「社会的な見方・考え方」を用いた教科の特質に根ざした追究の視点と、それを生かした課題(問い)の設定、諸資料等を基にした多面的・多角的な考察、社会に見られる課題の解決に向けた広い視野からの選択・判断、論理的な説明、合意形成や社会参画を視野に入れながらの議論などを通し、概念等に関する知識を獲得するように学習を設計することが求められている⁵⁾。

澤井陽介(2017)は、「社会的な見方・考え方」を用いることは、「思考力、判断力」と密接な関係があると述べ、社会的事象の特色や意味などを考える力、社会に見られる課題の解決に向けて選択・判断する力と記している⁶⁾。

これらのことから、「社会的な見方・考え方」を働かせた学習活動とは、図2に示す「社会的事象の地理的な見方・考え方」を働かせた学習活動であると考え

る。

図2ではまず、社会的事象の特色や意味などを理解し、学習課題を設定させる。そこで、自分の考えと諸資料とを比較させたり、関連付けさせたりするなどの方法で事実等に関する知識を獲得させる。さらに、事実等に関する知識と自分の考えを生かした疑問を基に、概念等に関する知識を理解させる学習活動を行う。その上で次に、論理的に説明させたり、合意形成を視野に入れながら議論させたりすることによって、社会に見られる課題を解決に向けて選択・判断させる学習活動を行うことを示している。

社会的事象の特色や意味などを考える学習活動	
社会的事象の地理的な見方・考え方	社会的事象を、位置や空間的な広がりに着目して捉え、地域の環境条件や地域間の結び付きなどの地域という枠組みの中で、人間の営みと関連付けること
社会的な見方・考え方の視点を活かした、考察や構想に向かう「問い」の例	・それは、どこに位置するだろう ・それは、どのように分布しているだろう ・そこは、どのような場所だろう ・そこでの生活は、まわりの自然環境からどのような影響を受けているだろう ・そこでの生活は、まわりの自然環境にどのような影響を与えているだろう ・そこは、それ以外の場所とどのような関係を持っているだろう ・その地域は、どのような特徴があるだろう
社会的な見方・考え方を働かせて	・地球上の地点は、絶対的、相対的に表現できること(熊野町は広島市の北西にあ

考察・構想した結果、獲得する知識の例	る) ・特定の事象は、地球の表面上で特定の範囲に広がること(熊野町は一年を通じ涼しく降水量も少ない) ・地球上の各地は、固有の性格があること(熊野町は四方を山に囲まれた高原盆地の広がる地域に、熊野川が流れている) ・人々の生活は自然の影響を受け、変化させること(平野の乏しい熊野町では、その傾斜地を段々畑や棚田にするなどして利用してきた) ・場所は相互に関係を持ち、影響を及ぼし合うこと(筆づくりなどを昔から行ってきた熊野町では、近隣の都市と商業で連携し、伝統工芸品を生産し、他地域へ届ける伝統産業が盛んである) ・空間の広がりとは、まとまりのある固有の特徴を持つこと(広島県の間部にある熊野町は、人口減少や高齢化の進む過疎化に悩んでいる)
--------------------	---



社会に見られる課題の解決に向けて選択・判断する学習活動	
社会的事象の地理的な見方・考え方	社会的事象を、位置や空間的な広がりに着目して捉え、地域の環境条件や地域間の結び付きなどの地域という枠組みの中で、人間の営みと関連付けること
社会的な見方・考え方の視点を活かした、考察や構想に向かう「問い」の例	・それは、地域への影響がどのように変容するのか、どのように広げる、どのような場所とする、どのような自然の恩恵を求める、どのように自然に働き掛ける、他の場所とどのような関係を持つ、どのような地域となるべきなのだろう
社会的な見方・考え方を働かせて考察・構想した結果、獲得する知識の例	・地域には、地域的特色を踏まえたよりよい姿が求められること(豪雨など自然災害を受けることの多い熊野町では、被害を最小限に食い止めるため、土砂災害に強い地域づくりを進めることが大切である)

図2 「社会的事象の地理的な見方・考え方」を働かせた学習活動 * () 内は熊野町の例を示す。

* 「答申」別添資料3-5と澤井(2017)を基に、筆者作成

2 持続可能な地域を構想させる授業について
(1) 持続可能な社会づくりとは

幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)(以下、「答申」とする。)では、社会の中で自ら問題を発見し解決していくためには、持続可能な開発目標⁷⁾(以下「SDGs」とする。)なども踏まえつつ、自然環境や資源の有限性、貧困、イノベーションなど、地域や地球規模の諸課題について、子供一人一人が自らの課題として考え、持続可能な社会づくりにつなげていく力の育成が求められている⁸⁾。

また、「29年解説」では、持続可能な社会の形成について、将来の世代のニーズを満たすようにしながら、現在の世代のニーズを満たすような社会の形成を意味し、世代間の公平、地域間の公平、男女間の平等、社会的寛容、貧困撲滅、環境保護、経済の開発、

社会の発展を調和の下に進めていくことと示され、持続可能な社会の形成を理解させ、探究させるとある⁽⁹⁾。

これらのことから、持続可能な社会づくりとは、様々な世代間や地域間のニーズを満たし、環境保護、経済の開発、社会の発展等の調和の下に社会を形成することと考えられる。

(2) 持続可能な地域を構想させる授業とは

「29年解説」では、各地域の学習において、地域的特色を構成している他地域にも共通に見られる性質（以下、「一般的共通性」とする。）と各地域のもつ独特の性質（以下、「地方的特殊性」とする。）を関連付けて扱うことと示され、「地方的特殊性」のみを対象にしているわけではない点に十分留意することが大切である⁽¹⁰⁾。

また、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて選択・判断する力を養うためには、特に、「持続可能性」に着目して「構想」することが大切である。方法として、持続可能性を拒んでいる最も大きな要因を焦点化し、その要因を排除する課題解決の方策を提案することが考えられる⁽¹¹⁾。

国立教育政策研究所(2012)では、表2に示す持続可能な開発のために求められる原則が、環境、経済、社会の三領域に持続可能な将来が実現できるような行動の変革をもたらすと示されている⁽¹²⁾。

表2 持続可能な開発のために求められる原則

普遍性	国内実施と国際協力の両面で率先して取り組む
包摂性	人権の尊重とジェンダー平等の実現を目指し、脆弱な立場の人々まで、誰ひとり取り残さない
参画性	あらゆるステークホルダーや当事者の参画を重視し、全員参加型で取り組む
統合性	環境・経済・社会の三領域の統合的解決の視点をもって取り組む
透明性と説明責任	取り組み状況を定期的に評価、公表する

*持続可能な開発目標（SDGs）実施指針 pp. 5-6 を基に筆者作成

これらのことから、持続可能な地域を構想させる授業とは、まず、社会に見られる課題について、表3に示す日本の諸地域の単元で取り上げた中核とした考察の仕方と内容を活用して、「一般的共通性」と「地方的特殊性」に着目した持続可能性を捉えさせ、次に、地域という枠組みの中で、表2の中の統合性の原則にある環境・経済・社会の三領域の統合的解決の視点をもって考察させ、他の生徒との議論

を通して自分の考えを選択・判断できる授業であるとする。

表3 日本の諸地域の単元で取り上げた中核とした考察の仕方と内容

地方	中核とした考察の仕方	内容
九州	環境問題・環境保全	公害、環境保全に向けた行政・企業・市民の取組、リサイクル
中国 四国	人口、都市・村落	人口の増減、過疎・過密、少子化、高齢化、都市の機能・再開発、町おこし・村おこし
近畿	歴史的背景	産業や文化・開発の歴史、市街地の広がり方、歴史的遺産などの種類・分布
中部	産業	主な農産物、林業、水産業、工業製品、原料の仕入れ先や商品の出荷先、観光産業
関東	交通・通信	高速道路、新幹線、空港、海上交通、通勤・通学、商品などの輸送、貿易、在留外国人
東北	生活・文化	伝統行事の継承、郷土料理、家屋、伝統工芸品、町並みの保存、教訓の伝承
北海道	自然環境	山、川、海岸、火山、気温、降水量、積雪量、予想される自然災害と防災対策

*「29年解説」p. 64 と東京書籍（令和2年）p. 178 を基に、筆者作成

(3) 持続可能な地域を構想させる授業の単元構成とは

「29年解説」では、「社会的な見方・考え方」を働かせた学習活動の学習過程の一例として、大きくは課題把握、課題追究、課題解決の三つが考えられ、また、それらを構成する活動の例としては、動機付けや方向付け、情報収集や考察・構想、まとめや振り返りなどの活動があると示されている⁽¹³⁾。

また、学習活動の内容の取扱いでは、「調査や諸資料から、社会的事象に関する様々な情報を効果的に収集し、読み取り、まとめる技能を身に付けるための学習活動」⁵⁾（以下、「作業的で具体的な体験を伴う学習」とする。）と、「社会的事象の意味や意義、事象の特色や事象間の関連、社会に見られる課題などについて、考察したことや選択・判断したことを論理的に説明したり、立場や根拠を明確にして議論したりするなど」⁶⁾（以下、「言語活動に関わる学習」とする。）が示されている。

さらに、社会科の改訂の基本的な考え方においては、持続可能な開発のための教育（以下、「ESD」とす

る。)などが重要であると示され、課題発見、解決のための「思考力、判断力、表現力等」とも相まって、身近な地域社会から地球規模に至るまでの課題の解決の手掛かりを得ることが期待されている⁽¹⁴⁾。

国立教育政策研究所(2012)では、教科等の指導において、単元(題材)の目標や授業の目標に、表4の持続可能な社会づくりのための課題解決に必要な七つの能力・態度に基づいて、付加したり関連付けたりすることを通して、「ESD」の視点に立った学習指導を展開することができると考えている⁽¹⁵⁾。

表4 持続可能な社会づくりのための課題解決に必要な能力・態度

	能力・態度
1	批判的に考える力
2	未来像を予測して計画を立てる力
3	多面的・総合的に考える力
4	コミュニケーションを行う力
5	他者と協力する態度
6	つながりを尊重する態度
7	進んで参加する態度

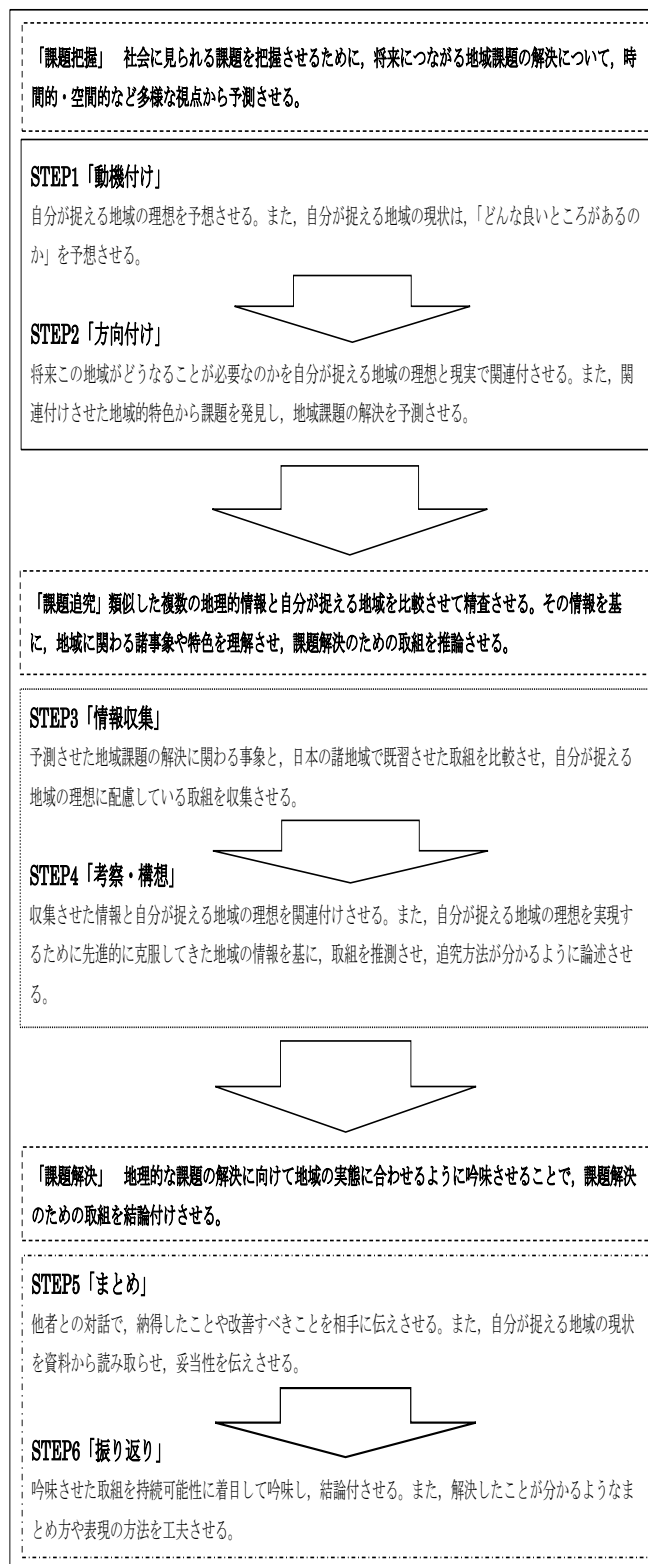
* 国立教育政策研究所(2012) p. 4 を基に、筆者作成

これらのことから、図3に示すような持続可能な地域を構想させる授業の単元構成では、表4に示す「2 未来像を予測して計画を立てる力」が重要であると考えられる。

まず、「課題把握」の場面では、STEP1「動機付け」やSTEP2「方向付け」の活動において、地域の過去や現在のニーズに基づき、あるべき将来像を予測させる。次に、「課題追究」の場面では、STEP3「情報収集」やSTEP4「考察・構想」の活動において、地域的特色が類似した地域の地理的情報を基に、地域の将来像に関わる課題を解決するための調和させる取組を推論させる。最後に「課題解決」の場面では、STEP5「まとめ」やSTEP6「振り返り」の活動において、地域の将来像に関わる課題を解決するために環境・経済・社会の三領域を調和させる取組を地域の実態に合わせて吟味させ、結論付けさせる。また、それらを他の生徒に持続可能であると想像させながら、三領域の関係図で考察させることが考えられる。

なお、後述の研究授業で活用したワークシートの記入例の資料③学習過程の例では、学習過程を構成する活動の中で、「言語活動に関わる学習」と「作業的で具体的な体験を伴う学習」を一層重視するための工夫として、解決したことを分かりやすいよう

に図にまとめ、可視化させている。



※ □ は「事実等に関する知識を習得する学習過程」、□ は「概念等に関する知識を習得する学習過程」、□ は「事実や概念等に関する知識を再認識する学習過程」を表す。
□ は「学習過程とその指導目標」、↓ は「活動の順番」を表す。

図3 持続可能な地域を構想させる授業の単元構成

* 「答申」別添資料3-6と国立教育政策研究所(2012) p. 4 を基に、筆者作成

(4) 持続可能な地域を構想させる授業の単元の学習過程とは

以下、学習過程ごとに論じる。

ア 「課題把握」の場面

「29年解説」では、社会に見られる課題を把握するためには将来につながる現代的な諸課題を踏まえた地域的な諸課題の解決について示され、時間的・空間的な多様な視点から考察する力を身に付けさせることが求められている⁽¹⁶⁾。

このことから、「課題把握」の場面では、まず「作業的で具体的な体験を伴う学習」として図3のSTEP1「動機付け」を行う。その際、「どんな地域に住みたいか。」「どんな地域に住んでいるのか。」を考察させ、自分の理想と地域の現状を関連付けることで、「自分が捉える地域の現状」とする。

また、表5に示す「ESD」の3大領域別社会問題を参考に地域的特色に関わる事象の問題を把握し、統合性を基に課題を設定する。

以上を踏まえ、後述の資料①の例では、「商業施設が少ない。」が地域の経済領域の社会問題である。この問題を環境領域・経済領域・社会領域の三領域で調和を取って解決する必要があるが、環境領域では「自然が豊かである」、社会領域では「人と人の交流が盛んである」という地域の現状に着目した経済領域の課題を考察させる。

次に、「29年解説」では地域的特色や地域の課題を捉えるには、地域の考察に当たって、そこに暮らす人々の生活・文化、地域の伝統や歴史的な背景、地域の持続可能な社会づくりを踏まえた視点に留意することとある⁽¹⁷⁾。

表5 「ESD」の3大領域別社会問題

(1)環境領域
海と海洋資源の保存と持続可能な利用、水と衛生の持続可能な管理、陸の生態系の保護（生物多様性）、気候変動への対策など
(2)経済領域
持続可能な近代的エネルギー、雇用と経済成長、災害に強いインフラと持続可能な産業化、都市と人間居住、持続可能な生産と消費、財源の不足など
(3)社会領域
貧困の克服、飢餓の克服と食料の安定確保、持続可能な農業、健康と福祉、公平で質の高い教育、男女平等、各国内及び各国間の不平等の是正、平和と公正など

* UNESCO（2004）pp. 17-20 と原田（2017）pp. 38-39 を基に、筆者作成

このことから、「自分が捉える地域の現状」と日本の諸地域の単元での既習事項とを関連付け、環境、経済、社会のそれぞれの領域に配慮させ、「言語活動に関わる学習」として図3のSTEP2「方向付け」を行

う。その際、「自分が捉える地域」の地域的特色に関わる事象の調和を図るために、統合性を考慮して予測することが必要である。そこで、表3の日本の諸地域の内容の具体的な事例を基に、同じ社会問題を解決している地理的事象を考察させることとする。

以上を踏まえ、後述の資料①の例では、「ショッピングセンターが欲しい。」という自分が捉える地域の理想を達成するためには、「自然が豊かである。」や「人と人の交流が盛んである。」のそれぞれと調和させる取組を考察させるために、九州地方と北海道地方での既習事項を参考にさせた。また、「自然が豊かである。」と「人と人の交流が盛んである。」の双方を調和させる取組を考察させるために、北海道地方や東北地方、関東地方での既習事項を参考にさせた。

イ 「課題追究」の場面

「29年解説」では、『「地域的特色」』は、大きく見ると、地域の環境条件、他地域との結び付き及びそこに居住してより豊かな生活を実現するために努力している人々の営みとの関わりの中で生み出され、地域の環境条件、他地域との結び付き、人々の営みが相互に影響を及ぼしながら地域的特色は形成され、変容している。⁷⁾と示されている。

このことから、「課題追究」の場面では、まず「作業的で具体的な体験を伴う学習」として図3のSTEP3「情報収集」を行う。そのために、STEP2「方向付け」の学習において、参考にした日本の諸地域の内容の具体的な事例を基に、一般的共通性に着目して、環境・経済・社会の三領域を調和させることができるような既習事項を選ばせる。

以上を踏まえ、後述の資料②の例では、「ショッピングセンターが欲しい。」という自分が捉える理想の地域において三領域を調和させる取組を考察させる。そこで、「自然が豊かである。」「人と人の交流が盛んである。」のそれぞれと調和させる取組として収集した地理的事象から「植林などのボランティア活動を行う。」と考察させる。他にも、「自然が豊かである。」と「人と人の交流が盛んである。」の双方を調和させる取組として収集した地理的事象から「自然を活かしたキャンプ場を造ったり、溪流下りを企画したりして、全国に発信する。」や「筆づくりなど伝統・文化の体験活動を企画して、さらに人々の交流を盛んにする。」と考察させる。

次に、「29年解説」では、「地域的特色は、様々な事象が結び付き、影響を及ぼし合って成り立っていることに着目して、地域的特色を中核となる事象と他の事象との関連から捉え、その成り立ちを考察する

こと」⁸⁾と示されている。

このことから、地域の特色の性質である「一般的共通性」に着目して「言語活動に関わる学習」として図3のSTEP4「考察・構想」を行う。まず、「自分が捉える地域の現状」と持続可能性とを関連付けて、STEP2「方向付け」の学習で参考にさせた表3の既習事項を基に、地域の環境・経済・社会の三領域を調和させる取組を考えさせ、論述させる。その際、環境・経済・社会の三領域全ての「自分が捉える地域の現状」と持続可能性とを関連付けさせ、推論させる。

以上を踏まえ、後述の資料②の例では、環境領域の「自然が豊かである。」と経済領域の「ショッピングセンターが欲しい。」の二つの領域について、「自然を生かしたキャンプ場を造ったり、溪流下りを企画したりして、全国に発信する。」という領域間を調和させる取組によって、「観光客が増え、ショッピングセンターができる。」という経済領域への影響を及ぼしたことを論述させる。

ウ 「課題解決」の場面

「29年解説」では、「調査結果をまとめたり発表したりする際には、調査結果だけでなく、調査結果を基に各自が解釈をすることを重視する観点から、結果を根拠に合理的な解釈になるよう意見交換しながら、多面的・多角的に追究したことが分かるようなまとめ方や表現の方法を工夫することが大切である。」⁹⁾と示されている。

このことから、「課題解決」の場面では、まず「作業的で具体的な体験を伴う学習」として、図3のSTEP5「まとめ」を行う。そのために、グループでの生徒同士のコミュニケーションをより大切にしつつ、他の生徒の疑問である「持続可能な地域として発展するにはどうしたらよいか」という問いかけに対して、そこで何か一つの結論を出すことを急がず、対話とアイデアの創発を促す。

以上を踏まえ、後述の資料③の例では、個人で考えながら、即興性や相互に触発し合うように話し合っ、そこで出た疑問や気付いたことを「矢印が双方向になっていないところは、調和が取れていると言えるの？」というように、話し言葉でワークシートへ書き込ませる。

次に「29年解説」では、「持続可能な社会づくりの点から見て優れていると思われる取組を調べ、それを参考に地域の実態に適合するように吟味して提案するなど、先進的な地域の取組に学ぶ方法も考えられる。」¹⁰⁾と示されている。

このことから、「言語活動に関わる学習」として、

図3のSTEP6「振り返り」を行う。そのために、STEP5「まとめ」で、「自分が捉える地域を持続可能な地域として構想することができているか」を基に、現在の地域的特色が、自分が捉える地域の現状に適合するかを吟味させ、結論付けさせることとする。

以上を踏まえ、後述の資料③の例では、経済領域の「観光客が増え、ショッピングセンターができる。」と、環境領域の「自然が豊かになる。」を、熊野町に適合するように吟味させ、「空き家を利用した店舗を造る。」という経済領域と環境領域とを調和させる取組として結論付けさせ、持続可能な地域を構想させる。

Ⅲ 研究の仮説及び検証の視点と方法

1 研究の仮説

学習者に、持続可能な地域を構想させることによって、「思考力、判断力、表現力等」を育成することができるであろう。

2 検証の視点と方法

研究授業を、表4の「2 未来像を予測して計画を立てる力」と、表2の統合性を活用し、「課題を基に、環境・経済・社会の三領域を調和させる取組を説明できる。」を評価規準とした診断的評価と形成的評価による評価・分析によって検証を行うこととする。

検証方法は、表6に示すプレテスト、授業、ポストテストである。プレテスト・ポストテストは図4に示す持続可能な地域を構想させる問題を実施する。

検証は、表7に示す検証の視点を基に、表8に示す四段階の判断の基準を設定し、東広島市を持続可能な地域にするための取組が環境・経済・社会の三領域を調和させていることをプレテストとポストテストを通して判断し、その変容によって「思考力、判断力、表現力等」の向上に有効であったどうかを分析する。

なお、地理的事象から見出した課題を解決するために必要な取組を提案し、その取組を提案した理由を記述させる問いと、その判断の基準を表9に示す。

表6 検証方法

内容	手順
1 プレテスト	既有知識の確認（記述式問題の出題）
2 授業	①単元計画を学年担当教員に説明 ②授業の実施
3 ポストテスト	振り返り（記述式問題の出題）

表7 検証の視点

1	地域的特色を考察することで地域の課題に気づき、その課題を解決するために必要な地理的事象を収集させる。
2	地域の環境・経済・社会の三領域全ての理想を実現するために、統合性を基に考察、選択・判断させる。
3	環境・経済・社会の三領域の理想を調和させる取組を構想させる。

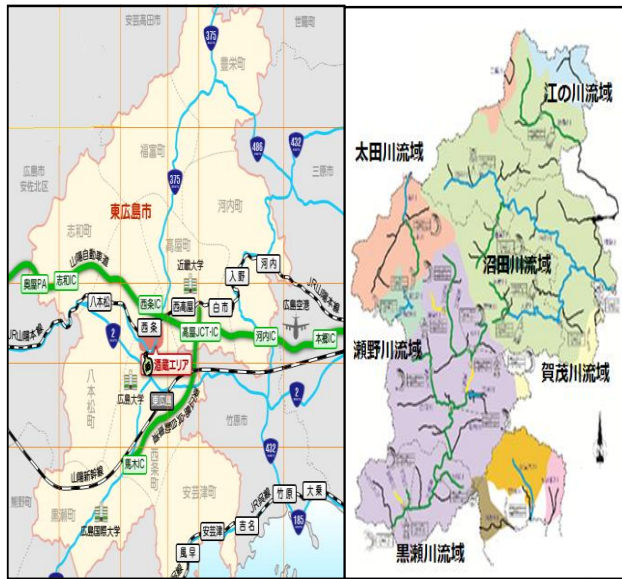
表8 プレテスト・ポストテストの判断の基準

A	東広島市を持続可能な地域にするために、地理的特色の性質である「一般の共通性」と「地方的特殊性」を根拠として三領域を調和させる取組を説明している。
B	東広島市を持続可能な地域にするために、社会的事象の地方的特殊性を根拠として三領域全てを調和させる取組を説明している。
C	東広島市を持続可能な地域にするために、三領域を調和させる取組を説明できていない。
D	東広島市を持続可能な地域にするために、三領域を調和させる取組を記述できていない。(未記入)

【問題】 Aさんは、社会科の授業で、東広島市を持続可能な地域にするために調べ、次の地域情報を得ました。Aさんは、この情報を基に、東広島市を持続可能な地域にするための取り組みを考え、あなたに伝えました。あとの資料から、IとIIの問いに答えなさい。

『東広島市の地域情報』

図1



※図1:東広島市観光協会参照 http://earthresources.sakura.ne.jp/er/Eto_H_HH.htm#Geography2

※図2:東広島市HP参照 <https://www.city.higashihiroshima.lg.jp/soshiki/seikatsukankyo/2/12/17377.html>

「自然環境」

- 東広島市の範囲は、瀬戸内海沿岸から内陸の山間地域まで広がり、標高差が大きく、寒暖の差も大きい。
- 河川(沼田川、黒瀬川、瀬野川)の源流がある。

「交通」

- 鉄道は、JR山陽本線(7駅)、JR呉線(2駅)、JR山陽新幹線(1駅)が、東西を横断している。
- 道路は、山陽自動車道が東西に横断し、東広島・呉道路が南北に縦断している。
- 隣接する三原市に広島空港がある。

「産業」

- 日本有数の日本酒の産地で、毎年10月には「酒まつり」が催され、多くの観光客が訪れる。
- 工業は、携帯電話機、自動車部品、造船などの工場がある。
- 商業は、ゆめタウン、フジグランなどのショッピングセンターがある。

「人口」

- 大学教員や留学生、研修生等の外国人も多く住んでいる。
- 東広島市の人口の推移(国勢調査)

年	人口	男性	女性	世帯数
平成2年	142,088人	70,547人	71,541人	45,787世帯
平成7年	165,153人	83,216人	81,937人	60,497世帯
平成12年	175,346人	88,093人	87,253人	67,911世帯
平成17年	184,430人	93,960人	90,470人	76,018世帯
平成22年	190,135人	96,952人	93,183人	80,986世帯
平成27年	192,907人	97,962人	94,945人	84,847世帯

※東広島市HPによる。

「都市」

- 水田地帯が広がっているが、稲の作付面積は年々減少している。
- ハザードマップで低い土地は、洪水による被害が想定されている。
- 新たな住宅地や道路の整備が進められている。
- 学園都市を形成しており、大学が4校、中高一貫校(3校)、高等学校が6校、中学校が14校、小学校が34校ある。そのうち、竜王小学校は2018年に新設されている。
- 広島テクノプラザなどを拠点として国の機関や企業が集積した広島中央サイエンスパークがある。

『あなたが考える東広島市』:Aさんの考えた取り組み

私は東広島市を、持続可能な地域にするために、人口をさらに増やしたいと思います。
そのためには、広島市と近い立地を活かして、今ある水田地帯や山間地域に住宅地や道路を整備して、人口を増やし、工場やショッピングセンターを増やして、働きやすく暮らしやすい地域にすることができると考えます。

【問い】

- Aさんが考えた東広島市を持続可能な地域にするための取り組みに対して、あなたはどのような修正案を提案しますか。東広島市の地域情報を基に、書きなさい。
- あなたは、Aさんの考えた取り組みをどうしてIのように修正したのですか。その理由を書きなさい。

図4 プレテスト・ポストテスト別添資料

*東広島市(令和2年)を基に、筆者作成

表9 プレテスト・ポストテストの問いと評価と判断の基準

	問い	評価	判断の基準
<u>I</u>	Aさんが考えた東広島市を持続可能な地域にするための取組に対して、あなたはどのような修正案を提案しますか。東広島市の地域情報を基に書きなさい。	十分	地域的特色を考察した課題を基に、三領域間全ての取組を構想している。
		やや不十分	地域的特色を考察した課題を基に、経済領域と環境領域間以外の取組を二つ構想している。
		不十分	地域的特色を考察した課題を基に、経済領域と環境領域間以外の取組を一つ構想している。
<u>II</u>	あなたは、Aさんの考えた取組をどうして <u>I</u> のように修正したのですか。その理由を書きなさい。	十分	環境・経済・社会の三領域を調和させる理由が書かれている。
		やや不十分	環境・経済・社会の三領域のうち、二つの領域の理由が書かれている。
		不十分	環境・経済・社会の三領域のうち一つの領域の理由しか書かれていない。

Ⅳ 研究授業について

1 研究授業の内容

- 期 間 令和2年12月1日～令和2年12月18日
- 対 象 所属校第2学年（3学級112人）
- 単元名 身近な地域調査 地域の在り方
- 目 標

熊野町を持続可能な地域にするために、環境・経済・社会の三領域を調和させる取組を構想することができる。

- 指導計画（全6時間）

時	学習内容
1 2	熊野町に見られる様々な地理的事象に関心をもち、魅力ある町とは何か気付き、現在と将来の地域的特色に着目させることで、課題を設定させ、環境・経済・社会の三領域を調和させる取組を予想させる。 「動機付け→方向付け」
3 4	予想させた取組を構築するために、日本の諸地域の単元での既習事項から必要な地理的事象を収集し、理想の熊野町の三領域を調和させる取組を推論させる。 「情報収集→考察・構想」
5 6	推論させた取組を適切に説明し、議論させることで、熊野町の地理的事象を踏まえて吟味させることで、持続可能な地域を結論付けさせる。 「まとめ→振り返り」

2 研究授業の概要

熊野町を持続可能な地域にするために、現状の地域と理想の地域とを関連付けて課題設定し、環境・経済・社会の三領域を調和させる取組を推論させる。

次に持続可能な熊野町について、グループで議論させ、現在の地域の地域的特色を踏まえて吟味させ、自分の考えた環境・経済・社会の三領域を調和させる取組を結論付けさせる。

指導計画5・6時の研究授業で活用するワークシートの記入例は、図5の資料③「課題解決」の場面、評価規準は表10の資料③「課題解決」に示す。

表10 ワークシートの評価規準

資料① 「課題把握」	熊野町を環境・経済・社会の三領域の調和の取れた持続可能な地域にするために、日本の諸地域の単元での既習事項の中から活用できる取組を収集できる。
資料② 「課題追究」	日本の諸地域の単元での既習事項を根拠として環境・経済・社会の三領域を調和させる取組を推測できる。
資料③ 「課題解決」	推測した取組を基に、熊野町の現状を踏まえて吟味することで、環境・経済・社会の三領域を調和させる取組を結論付け、表現できる。

「課題把握」 めあて：

2年 組 番 氏名

問1：あなたは、「いつ」、「どこで」、「何がある」地域に住みたいですか。また、以下の表を活用して、自分が住みたい地域の理想を環境・経済・社会に区分して図に表しなさい。

高校生になって学校の近くに住み、自然が豊かで地域の交流があり、いろいろな種類のお店がある地域。

環境	「自然環境」「環境問題・環境保全」
経済	「産業」「交通・通信」
社会	「生活・文化」「歴史的背景」「人口、都市・村落」

問2：あなたは、熊野町の現状で良いところ又は、有名なことを予想し、問1で示した表を参考に区分して図に表しなさい。

自然が豊かで、地域に人が集まり、交流がある町

問3：問1と問2を関連付けて、共通する部分に実線を引き、「自分が捉える理想の熊野町」にするための課題を見つけなさい。

商業施設が少ない。

問4：熊野町を自分が捉える地域の理想にするには、どんな目標を設定しますか。また、その目標を達成するためにはどんな情報が必要かを予想して探しなさい。

目標：「持続可能な熊野町」
取組に必要な情報：
自然が豊かで、人々の交流がある状態を保ち、ショッピングセンターを造ることができる取組を、日本国内の取組から探す。

《環境領域》

自分が捉える地域の理想/現状
・自然が豊かである。(理想＝現状)

《経済領域》

自分が捉える地域の理想/現状
・商業施設が少ない。(現状)
↓
・ショッピングセンターが欲しい。(理想)

《社会領域》

自分が捉える地域の理想/現状
・人と人の交流が盛んである。(理想＝現状)

取組
・北海道地方と東北地方の取組の情報を収集する。

取組
・九州地方と北海道地方の取組の情報を収集する。

取組
・東北地方と関東地方の取組の情報を収集する。

持続可能な熊野町

資料①「課題把握」の場面

「課題追究」 めあて： 2年 組 番 氏名

問1：「理想の熊野町」にするには、何が重要ですか。□で囲みなさい。
また、「作業手順」を確認して右の図を完成させなさい。

《環境領域》

自分が捉える地域の理想/現状
・自然が豊かである。(理想=現状)

取組
・自然を活かしたキャンプ場を造ったり、溪流下りを企画したりして、全国に発信する。

取組
・植林などのボランティア活動を行う。

《社会領域》

自分が捉える地域の理想/現状
・人と人の交流が盛んである。(理想=現状)

取組
・筆づくりなど伝統・文化の体験活動を企画して、さらに人々の交流を盛んにする。

《経済領域》

自分が捉える地域の理想/現状
・ショッピングセンターが欲しい。(理想)
・観光客が増え、ショッピングセンターができる。
・筆づくりなどの体験活動の場所をショッピングセンター内に設ける。

持続可能な熊野町

「作業手順」
①「課題把握」で環境・経済・社会に書いた自分が捉える地域の現状と理想の地域に欲しいものを書く。
②自分が捉える地域(主張)、「課題把握」で収集した「日本の諸地域」の情報を参考に調和する取組を書く。
③ → で環境・経済・社会の「自分が捉える地域の現状」と「取組」の関係を表す。

問2：問1で完成した図が実現可能かどうかを確認するために注意する点は何ですか。

①自分が捉える地域の現状の環境面と社会面の現状を維持しつつ、課題となる経済領域の現状を解決する取組となっている。
②自分が捉える地域の現状の環境領域と社会領域間を調和させた取組になっている。

問3：問2を注意しながら、「理想の熊野町」を持続可能にさせる取組であることを説明できるように清書しなさい。

資料②「課題追究」の場面 (下線が実線の部分は「課題把握」の場面の記述を示す。)

「課題解決」 めあて： 2年 組 番 氏名

問：対話後、「理想の熊野町」を持続可能な地域として構想するために、次の「作業手順」に従って構想図を完成させなさい。

「作業手順」
①グループのメンバーに、疑問に思ったことを書いてもらう。
②自分が捉える地域の現状が持続可能になっているかについて、気付いたことを右の枠内に書く。
③①や②について、もう一度考え、図に解決するために、必要な修正又は付け加えに破線を、環境・経済・社会の「自分が捉える地域の現状」と「取組」の関係を...→で表す。

② 気付いたこと
・説明した内容に、熊野町の課題(事実)や自分の捉える地域の現状(主張)と日本の諸地域の取組(裏付け)はあるが、熊野町の地域的特色(理由)が書かれていない。
・自分が捉える地域の現状の経済領域の課題を解決できているが、調和するためには、解決した経済領域と、環境領域と社会領域のそれぞれが調和する取組が必要なのではないか。

矢印が双方向になってないところがあるけど、調和が取れていると言える？ Eくん

環境領域と社会領域から経済領域への取組で、熊野町の経済領域にどんな影響の変化がある？ Dくん

理想の熊野町にするための取組なのにこの情報(日本の諸地域)だけで大丈夫？ Cくん

理想の熊野町にするために他に何かできる取組はない？ Aくん

人が集まる地域の課題はない？ Bくん

《環境領域》

自分が捉える地域の理想/現状
・自然が豊かになる。(現状)
・自然破壊を抑える。

取組
・自然を活かしたキャンプ場を造ったり、溪流下りを企画したりして、全国に発信する。
・空き家を活用した店舗を造る。

《社会領域》

自分が捉える地域の理想/現状
・人と人の交流が盛んである。(現状)
・ペットタウン化が進み、夜間人口が増える。

取組
・植林などのボランティア活動を行う。
・ゴミ拾いやリサイクルも行う。

《経済領域》

自分が捉える地域の理想/現状
・ショッピングセンターが欲しい。(理想)
・観光客が増え、ショッピングセンターができる。
・筆づくりなどの体験活動の場所をショッピングセンター内に設ける。

取組
・筆づくりなど伝統・文化の体験活動を企画して、さらに人々の交流を盛んにする。
・熊野道路を無料化する。

持続可能な熊野町

資料③「課題解決」の場面 (下線が実線の部分は「課題把握」の場面の記述、波線の部分は「課題追究」の場面の記述を示す。)

図5 研究授業で使用するワークシートの記入例

*佐藤真久・田村学(2020)を基に、筆者作成

V 研究授業後に行った分析と考察

1 プレテスト・ポストテストの分析

表9のプレテストとポストテストの判断の基準に示す三領域を調和させる取組により、もたらされた環境・経済・社会の三領域の地域的特色への影響を、表11に示すt検定検査により分析した。

この分析から、有意水準1%において、プレテストとポストテスト

表 11 t 検定検査

有意水準 α	0.01
p 値 (両側)	0.000396281

の検査結果に有意な差があり、環境・経済・社会の三領域を調和させることができたと考える。

次に、表8に示すプレテストとポストテストの判断の基準を基に集計した結果を表12に示す。プレテストで調和させる取組が「十分」の生徒は9人だったが、ポストテストでは30人に増加していた。プレテストは評価Cの「やや不十分」「不十分」と評価Dの「未記入」の生徒(18人)が、ポストテストでは評価Aの「十分」に上がっていた。

表 12 プレテスト・ポストテストの判断の基準のクロス集計結果 (n=97)

		ポストテスト				合計
		A	B	C	D	
プレテスト	A	6	3	0	0	9
	B	6	4	0	0	10
	C	14	8	44	6	72
	D	4	0	0	2	6
	合計	30	15	44	8	97

最後に、表9に示すプレテスト・ポストテストの判断の基準から分かることを表13に示す。プレテストとポストテストの間1と間2の結果を比較すると、「間1が十分できている」は10ポイント、「間2が十分できている」が26ポイント増加していた。

このことから、持続可能な地域を構想するための取組を、課題を解決するために必要な地理的事象を収集させ、統合性を基に三領域を調和させるように考えた取組を考察、選択・判断させたことに一定程度の効果があったと考える。

表 13 「間1」と「間2」の比較 (n=97)

間1 評価	プレテスト	ポストテスト	間2 評価	プレテスト	ポストテスト
十分	33%	43%	十分	20%	47%
やや不十分	67%	57%	やや不十分	74%	45%
不十分	0%	0%	不十分	6%	8%

一方で、表12に示したプレテスト・ポストテストの結果が評価Cに留まった生徒は44人おり、全体の約

半数を占めている。それらの生徒について、表14に示す「修正案が領域間で対応していない取組の数」と「提案した修正案の理由」とを比較すると、プレテストにおいて間1の三領域全てで取組が対応していない数が9, 19, 15と多いとき、間2の環境・経済領域の理由が「不十分」であった。ポストテストにおいては間1の三領域全てで対応していない取組の数が4, 4, 1と減少し、間2の「不十分」の数が減った。そのことから、間2の環境・経済領域の理由が「十分」の数が増加したことが分かる。

このことから、本研究により、環境・経済領域を調和させる意義を考察させることに効果があったと考える。

また、プレテストとポストテストの両方で、間1の環境領域と経済領域の間と、環境領域と社会領域の間で対応していない取組の数が15, 21と多いとき、間2の環境・社会領域の理由が「不十分」であり、ポストテストでの改善が見られなかったことが分かる。

このことから、本研究授業においては、環境・社会領域を調和させる意義を十分に考察させることができなかったと考える。

表 14 評価Cの生徒がプレテスト・ポストテストで提案した修正案の数の内訳 (n=132)

間2 提案した修正案の理由	検証方法	評価	領域	間1 修正案が領域間で対応していない取組の数		
				環境 ⇄ 経済	環境 ⇄ 社会	社会 ⇄ 経済
				環境	経済	社会
間2 提案した修正案の理由	プレテスト	やや不十分	環境	12	9	3
			経済	0	0	1
			社会	3	4	1
		不十分	環境・経済	9	19	15
			環境・社会	15	21	1
	ポストテスト	やや不十分	環境	3	0	0
			経済	0	1	0
			社会	3	1	0
		不十分	環境・経済	4	4	1
			環境・社会	24	28	3

2 ワークシートの記述から生徒の変容を分析

表10のワークシートの評価基準を参考に、本単元では三領域を調和させる取組を考察させる学習活動は、「課題追究」「課題解決」の場面で行った。よってこの二つの学習過程のワークシートの記述を分析することとする。表15は、「課題追究」「課題解決」の場面において、領域間を調和させる取組として十分ではなかった取組を比較・分析した結果である。

「課題追究」の場面で、環境領域と社会領域の領域間を調和させる取組が「不十分」の数が50個だったが、「課題解決」の場面では、30個に減少した。

また、社会領域と経済領域の領域間を調和させる取組が「不十分」の数は、15個から9個に減少した。

このことから、「不十分」の数は減少したが、その数は多いので社会領域を、環境領域や経済領域と調和させる取組の意義を十分に考察させることができなかったことが推測できる。

表 15 「課題追究」「課題解決」の場面において領域間を調和させる取組が「不十分」の数 (n=132)

「課題追究」		領域間の取組数	「課題解決」		領域間の取組数
領域	環境⇄経済	5	領域	環境⇄経済	5
	環境⇄社会	50		環境⇄社会	30
	社会⇄経済	15		社会⇄経済	9

次に、表12においてプレテストの評価がCの生徒の中で、ポストテストの評価がAに向上した生徒Aと、ポストテストも評価がCのままだった生徒Bの「課題追究」と「課題解決」の場面の比較を図6に示す。

「課題追究」の場面			
領域 ↓取組 領域	三領域を調和させる取組		
	生徒A	生徒B	
環境 ↓取組	環境を保全できる。 ↓エコタウンを造る。	緑を少なくする。 ↓山の中に筆作りの施設を造る。	
社会	伝統文化を継承できる。	筆作りを多くする。	
社会 ↓取組	伝統文化を継承できる。 ↓熊野筆を通販で売る。	筆作りを多くする。 ↓生産者を増やす。	
経済	交通網を発展できる。	労働者の雇用を増やし、人口が増える。	
経済 ↓取組	交通網を発展できる。 ↓エコツーリズムを行う。	産業が盛んになる。 ↓交通網を整備する。	
環境	豊かな自然を守れる。	人が生活できる環境が整う。	

「課題解決」の場面			
領域 ↓取組 領域	三領域を調和させる取組		
	生徒A	生徒B	
環境 ↓取組	環境の保全ができる。 ↓地域の人に昔の遊び方や料理を教わる。	緑を多くする。 ↓山の中に筆作りの施設を造る。	
社会	伝統文化を継承できる。	筆作りを多くする。	
社会 ↓取組	伝統文化を継承できる。 ↓熊野筆を通販で売り、生産を増やす。	筆作りを多くする。 ↓生産者を増やすため、農業をする土地を開拓する。	
経済	交通網が発展できる。	農業が盛んになる。	
経済 ↓取組	交通網を発展できる。 ↓エコツーリズムによる観光を行うことによって、周辺地域からの観光客を増やす。	農業が盛んになる。 ↓農地を増やす。	
環境	環境の保全ができる。	豊かな自然を守る。	

図6 生徒Aと生徒Bの「課題追究」の場面と「課題解決」の場面の比較（下線が実線の部分は、記述の変容を示す。）

図6の生徒Aと生徒Bを比較してみると、生徒Aは三領域を調和させる取組にするために必要な地域的特色を捉えているが、生徒Bは、社会領域に関わる地域的特色を十分に捉えていないことが分かる。

また、プレテストとポストテスト結果が評価Cで三領域を調和させる取組が不十分な生徒の記述には、領域の文末の記述が「～なる。」「～できる。」ではなく、「～する。」が多いことが分かる。特に、三領域の意義と自分が考えた取組による三領域への影響を考察できていないことが推測できる。

そこで、「課題解決」の場面で、地域的特色を基に吟味させた図6と同じ生徒A、Bへ質問し、生徒A、Bの回答を基に、以下の表16に整理した。

表 16 プレテストが評価Cの生徒への質問と回答

質問	生徒Aの回答	生徒Bの回答
1: 熊野町の課題である少子高齢化を解決するために、特産品を地域ブランドとして売り出したり、宣伝したりするなどの町おこしイベントを開催すると、環境・経済・社会の三領域のどの領域への影響が大きいですか。	環境領域は、影響がほとんどはない。経済領域と、社会領域への影響が大きい。	町おこしで、経済領域に影響がある。
2: ベン図の三領域に、どのような記述をしましたか。	環境領域は、自然環境が保全できる。経済領域は、イベントを開催できるお店ができる。社会領域は、文化が広まる。	経済領域は、人が増える。

表16から、生徒Aは地域的特色を生かした取組による三領域への影響を考察できていることが分かる。

一方、生徒Bは地域的特色を生かした取組による三領域への影響を考察させることが難しかったと分かる。

そこで、図6に示す生徒Aと生徒Bそれぞれの記述の分析をする。

まず、生徒Aは図5の資料③の「課題解決」の場面においてグループ内で説明を行ったときに、他の生徒から「店をつくるには土地が必要ですが、その案で自然環境を守り、熊野の文化を未来に継承できますか。」「熊野筆を通販で売るだけで、交通網の整備が進むのですか。」「熊野町の現状から本当に経済が発展しますか。」「自然を生かした体験をすることで、経済にどんな影響がありますか。」と疑問を投げかけられた。それらの疑問に対して「地域の人に昔の遊び方や料理を教わる。」「熊野筆を通販で売り、生産を増やす。」「エコツーリズムによる観光を行うことによ

て、周辺地域からの観光客を増やす。」などの地域的特色と日本の諸地域の単元での既習事項を基に、三領域を調和させる取組を十分に考察していると考えられる。

また、他の生徒からの疑問に対する取組案について、図2で示す社会的な事象の地理的な見方・考え方の視点を基に分析してみると、生徒Aは、他の生徒からの疑問に答えるために、「エコツーリズムによる観光を行うことによって、周辺地域からの観光客を増やす。」という取組を考えた。

この取組は、熊野町と広島市や東広島市などの位置関係と交通網のつながりを捉え、熊野町の自然環境と交通網とを関連付けた取組であると考えられる。

このことから、生徒Aは熊野町の課題を位置や空間的な広がりから捉え、地域の環境条件や地域間の結び付きなどの地域という枠組みの中で、環境領域と経済領域を十分に関連付けることができていると考える。

次に、生徒Bは、図5の資料③の「課題解決」の場面でグループ内で説明を行ったときに、他の生徒から「緑を少なくすることで環境領域をよくすることができますのですか。」「農業をする土地はどうするのですか。」といった疑問を問いかけられた。それらの疑問に対して「山の中に筆作りの施設を造る。」「生産者を増やすため、農業をする土地を開拓する。」「農地を増やす。」など環境領域と経済領域の地域的特色を考察しているが、社会領域の地域的特色を考察していなかったと考えられる。

このことから、生徒Bは、環境・経済・社会の三領域を調和させる取組を考察することが不十分であったと考える。

また、他の生徒からの疑問に対する取組案について、図2で示す「社会的な事象の地理的な見方・考え方」を働かせた学習活動を基に分析してみると、生徒Bは、他の生徒からの疑問に答えるために、「農地を増やす。」という取組を考えた。

この取組は、熊野町などの位置関係や産業とのつながりが反映されておらず、熊野町の環境領域における理想と産業との関連付けが不十分な取組であると考えられる。

このことから、生徒Bは熊野町の課題を位置や空間的な広がりから捉え、地域の環境条件や地域間の結び付きなどの地域という枠組みの中で、環境領域と経済領域とを関連付けることが不十分であったと考える。

以上のことを踏まえ、評価Cに留まった生徒が多

かった理由としては、本研究授業において、社会領域に関わる視点を理解させるための疑問が十分に問いかけていないことが挙げられる。

VI 研究のまとめ

1 本研究の成果

本研究の成果は、持続可能な地域を構想させる授業を行うことによって、「思考力、判断力、表現力等」を育成することができることを一定程度確認できたことである。具体的に三点挙げる。

一点目は、「課題追究」の場面において、情報を活用する学習活動の際、課題を解決するための事実等に関する知識を活用することで、持続可能性に着目した取組を考察できる生徒が増加した点である。

二点目は、「課題解決」の場面において、対話後に、解決に向かわせる概念等に関する知識を活用することで、持続可能性に着目した取組を吟味できた生徒も増加した点である。

三点目は、「主体的・対話的で深い学び」を通して持続可能な地域を構想させるワークシート（環境・経済・社会の三領域の関係図）を開発することができた点である。

2 本研究の課題と今後の展望

本研究の課題は、次の三点を挙げる。

一点目は、授業において、環境領域と経済領域の領域間を調和させる取組を吟味させることは十分行えたが、社会領域に関わる領域間を調和させる取組を吟味させることが不十分であった点である。

二点目は、「課題解決」の場面で、熊野町について地理的情報を調査させたり、地域的特色を考察させる時間の確保が不十分であり、熊野町の特徴を基に三領域を調和させる取組を考察させることが不十分であった点である。

三点目は、今後の課題として、持続可能な社会づくりの構成概念である「有限性」と「批判的に考える力」を活用する取組が不十分であり、新たな課題に対する授業実践までは、十分に扱えなかった点である。

以上のことを踏まえて、今後は、本研究で行った環境・経済・社会の三領域を調和させるための学習を発展させ、公民的分野の既習事項を活用することで社会領域の視点を養い、新たな課題を解決することによって持続可能な地域を構想させる授業モデルについて研究していきたい。

【注】

- (1) 文部科学省(平成30年):『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説社会編』東洋館出版社p. 6を参照されたい。
- (2) 文部科学省(平成30年):前掲書p. 11を参照されたい。
- (3) 文部科学省(平成30年):前掲書pp. 169-170を参照されたい。
- (4) 文部科学省(平成30年):前掲書p. 29を参照されたい。
- (5) 文部科学省(平成30年):前掲書p. 15を参照されたい。
- (6) 澤井陽介(2017):『見方・考え方 社会編』東洋館出版社pp. 15-18を参照されたい。
- (7) 中央教育審議会(平成28年):『幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)』p. 41を参照されたい。
- (8) 中央教育審議会(平成28年):前掲書pp. 40-41を参照されたい。
- (9) 文部科学省(平成30年):前掲書p. 164を参照されたい。
- (10) 文部科学省(平成30年):前掲書p. 79を参照されたい。
- (11) 文部科学省(平成30年):前掲書p. 73を参照されたい。
- (12) 国立教育政策研究所(2012):『学校における持続可能な発展のための教育(ESD)における研究[最終報告書]』p. 3を参照されたい。
- (13) 文部科学省(平成30年):前掲書p. 12を参照されたい。
- (14) 文部科学省(平成30年):前掲書pp. 9-10を参照されたい。
- (15) 国立教育政策研究所(2012):前掲書p. 7を参照されたい。
- (16) 文部科学省(平成30年):前掲書p. 13を参照されたい。
- (17) 文部科学省(平成30年):前掲書p. 65を参照されたい。

【引用文献】

- 1) 文部科学省(平成30年):『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説社会編』東洋館出版社:前掲書p. 11
- 2) 文部科学省(平成30年):前掲書p. 31
- 3) 文部科学省(平成30年):前掲書p. 13
- 4) 文部科学省(平成30年):前掲書p. 24
- 5) 文部科学省(平成30年):前掲書p. 177
- 6) 文部科学省(平成30年):前掲書p. 176
- 7) 文部科学省(平成30年):前掲書p. 31
- 8) 文部科学省(平成30年):前掲書p. 66
- 9) 文部科学省(平成30年):前掲書p. 74
- 10) 文部科学省(平成30年):前掲書p. 73

【参考文献】

持続可能な開発目標推進本部(2016):『持続可能な開発目標実施指針』内閣府
東京書籍(令和2年):『新しい社会 地理』東京書籍株式会社
佐藤真久・田村学(2020):『探究×SDGs』朝日新聞社
UNESCO(2004):『ESD 国際実施計画フレームワーク』
原田智仁(2017):『中学校新学習指導要領の展開 社会編』明治図書出版株式会社
東広島市(令和2年):『東広島市 未来に挑戦する自然豊かな国際学術研究都市』
<https://www.city.higashihiroshima.lg.jp/kanko/index.html> (最終アクセス 令和2年11月18日)